

東京女子医科大学看護学会の未来に向けて

山 寄 住 江（東京女子医科大学病院）

私が東京女子医科大学看護短期大学を卒業した1975年過ぎ、看護短期大学の教員が病院の病棟の看護師に対し、看護体制や看護ケアについて、患者様に対し看護の責任等一緒に考えていた教育病棟というシステムがあった。教員と臨床が一体となり「良い看護を提供したい…」という合言葉のもとカンファレンスや事例の検討会を開き互いに研鑽を積んできた。私は「忙しいから研究できない」と思っていたが、「良い看護をしたい患者さまにはセルフコントロールが一日も早く出来るようになって退院してほしい」という気持ちは持ち続けている。臨床での看護ケアに疑問を感じそれを解決したり、考えたりする時、研究の土壌ができている教員の力を借り、一緒に看護について考えたり互いに学べたらよいと思う。

病棟では看護学部の卒業生が増えてきている昨今、看護研究に対しての考え方、取り組んできたことを尋ねたり、見たりしていると看護の根拠や看護に対しての姿勢は私が卒業した直後よりはるかにしっかりしているように感じる。これらのスタッフを抱え指導していこうとするとき、改めて教育病棟のあった私の中での「良き時代」を思い出す。

これからの臨床での疑問を解決するときや今よりもっと「良い看護をしたい」と思ったとき、あるいは素朴な疑問が生じたとき看護学会での発表やシンポジウムなどを通し「最近の看護」を学んでいき、卒業生や今いるスタッフが疑問を解決でき、看護の根拠が学べるよう看護学会には期待したいと思っている。そして誰でもが気楽に参加できるような学会であって欲しいと願っている。
